

# 村へ帰った傷兵

小川未明

青空文庫



上等兵 小野清作は、陸軍病院の手厚い治療で、腕の  
 傷口もすっかりなおれば、このごろは義手を用いてなに不自由  
 なく仕事ができるようになりました。ちようどそのころ、兵免  
 令が降つたので、彼はひとまず知り合いの家におちついて、い  
 よいよ故郷へ帰ることにしたのであります。  
 胸の右につけられた、燦然として輝く戦傷徽章は、その  
 戦功と名誉をあらわすものであると同時に、これを見る健全  
 の人々は、この国家のために傷ついた勇士をいたわれという、

温かい心のこもる貴いものでありました。どこへいくときにも、  
身につけよと、上官からいわれたのであるが、何事にも内  
気で、遠慮勝ちな清作さんは、同じ軍隊におつて朝晩辛  
苦をともしした仲間で、死んだものもあれば、また、いまも前  
線にあつて戦いつつある戦友のことを考えると、自分は武運  
つたなくして帰還しながら、なんで、これしきの戦傷を名誉  
として人に誇ることができようか、しかも戦争はなおつづけら  
れているのだ。自分には、すこしもそんな気持ちがなくとも、こ  
の徽章をつけていれば、あるいは人々にそうとられはしない  
かというとりこし苦労から、なるたけ外へ出るときにもこれをつ  
けぬようにしていました。

しかし、今日は、故郷へ帰ることを申しあげに、靖国神社へお詣りをするのであります。清作上等兵は、軍服の威儀をただして、金色の徽章を胸につけ、堂々として宿を出かけたのであります。

こうして見る清作さんは、じつにりっぱな軍人でした。だから町を通ると、男も女も振り向いて、その雄々しい姿をながめたのです。けれど中には、ぽかんとして、無表情な顔つきで見送るような、子供を背負った女もいました。

「世間の人たちは、勲章とでも思っているのかな。」

清作さんは、顔に微笑をうかべました。なぜ彼はそんなことを思ったでしょう。それは、この人たちの顔に、戦傷徽章

に對<sup>たい</sup>しても、なんのかなしみの影<sup>かげ</sup>が見<sup>み</sup>えなかつたからです。

このときあちらから、紳士<sup>しんし</sup>ふうの若い男<sup>わか おとこ</sup>と、頭髪<sup>とうはつ</sup>をカールして、美装<sup>びそう</sup>した女の人がきかかり、やがて彼<sup>かれ</sup>とすれちがつたが、その人<sup>ひと</sup>たちは、まんざら学問<sup>がくもん</sup>のない人<sup>ひと</sup>とは思<sup>おも</sup>われなかつたのに、やはり徽<sup>き</sup>章<sup>しよう</sup>には氣<sup>き</sup>のつかぬようなようすでいきすぎてしまひました。

「私<sup>わたし</sup>は、いままであまり思<sup>おも</sup>いすぎていたようだ。」と、清作<sup>せいさく</sup>さんは、つぶやきました。なぜなら、世間<sup>せけん</sup>は、戦争<sup>せんそう</sup>にたいして無<sup>む</sup>関<sup>かん</sup>心<sup>しん</sup>なのか、それとも軍人<sup>ぐんじん</sup>が戦争<sup>せんそう</sup>にいつて負傷<sup>ふしよう</sup>をするのをあたりまえとも思<sup>おも</sup>っているのか、どちらかのようにしか考<sup>かん</sup>えられなかつたからでした。けれど人間<sup>にんげん</sup>であるうへは、同<sup>どう</sup>胞<sup>ほう</sup>が

こんな姿すがたとなつたのを見て、なんとも心こころに感じかんないはずがあるろうかと考かんえると、むらむらと義憤ぎふんに燃もえるのをどうすることもできませんでした。

「なに、いつの時代じだいにもくさつた人間にんげんというものはいるものだ。」

青々あおあおとした空そらをあおいで、深い呼こ吸きをつづけました。

靖国神社やすくにじんじやの神殿しんでんの前まえへひざまずいて、清作せいさくさんは、低ひくく頭あたまをたれたときには、すでに討死うちじにして護国ごこくの英霊えいれいとなつた、戦友せんゆうの気高けだかい面影おもかげがありありと眼前がんぜんにうかんできて、熱あつい涙なみだが玉砂利たまじりの上うえにあふれ落ちるのを禁きんじえませんでした。この瞬間しゆんかんこそ、心こころが悲かなしみもなく、憤いきどおりもなく、自分じぶんの体からだじゆう

が明るく、とうとく感ぜられて、このまま神の世界へのぼつていくのではないかとさえ思われたのであります。

お詣りをすますと、後に心をひかれながら、九段の坂を下りました。そして、町の停留場へきて電車をまつていました。身の周囲を見ても知らぬ人ばかりであつたが、突然口ひげの生えた角顔の男の人が、彼の前へやつてきて、ていねいに頭を下げました。

清作さんは、あまりだしぬけだつたのと、その人の顔を見て、覚えがなかつたので、びつくりしながら、たぶん人違いであるうと思ひました。すると、その人は、

「ご苦労さまでした。どこをおげがなされましたか。」と、静か

な調子で、たずねました。

「ああ、私の傷ですか、こちらの腕をやられました。」と、清作さんは左の腕を指しました。そして、よく戦傷徽章に目をつけて、たずねてくれたと、深く心に感謝しながら、じつとその人を見たのであります。

「おお、それは、この寒気に、傷口がお痛みになりはしませんか？ 私は、若い時分シベリア戦役にいったものです。いまでも死んだ戦友のことや、負傷した友だちのことを片時もわすれることがありません。」

その老人の目はかがやき、言葉は熱をおびて、顔かたちにしみじみと真情があらわれていました。これをきくと、清作

さんは、はじめて見るこの人にたいして、かぎりなき懐かしさと敬意を表せずにはいられません。しぜんとその人の前に頭が下がるのを感じました。

ほどなく、電車がきたので乗ったけれど、停留場で見送る、老人の顔が、いつまでも頭に残りました。おりあしく、

その電車は満員でした。彼は、右手でしっかりと釣り革にぶら下がっていたが、あちらへおされ、こちらへおされしなければなりません。そして、こんなばあいに、これらの人たちが彼の徽章に注意すると考えるこそ、まちがっていたのであります。彼が、顔を赤くしてたおれまいとしたとき、

「兵隊さん、ここへおかけなさい。」という子供の声が、きこ

えました。見ると混雑した人をわけて立ち上がったのは、八、  
 九歳ばかりのランドセルを負った二人の小学生でありました。  
 「やあ、ありがとうございます。」と、清作さんは、救われた  
 ような気がして、そこへ腰を下ろしました。そして、はじめて二  
 人の子供を見ると、子供は、なにかいいかげに、清らかな瞳を人  
 とびとあいだ  
 々の間から、こちらへむけているのでした。  
 「ああ、子供はいいな。」と、清作さんは、真に感動しまし  
 た。

その晩ばんのことでした。清作せいさくさんは、故郷こきょうへ帰かえる汽車きしやの中なかにいたのであります。彼はかれ、眠ねむろうとしても眠ねむられず昼間ひるまのことなど思おもい出だしていました。

「そうだ。村むらの源げん吉きちさんもシベリア戦せん役えきにいつて、片腕かたうでをもがれたのだった。あの時分じぶん、自分じぶんはまだ子供こどもだったので、源げん吉きちさんが不具かたわになつて帰かえつてくると、おそろしがつたものだ。

自分じぶんばかりでなく、ほかの子供こどもたちも気味悪きみわるがつてそばへいかなかつたのだ。それにくらべると、このごろの子供こどもは、なんというりこうで、やさしいことだろう。源吉げんきちさんは、みんなのため、戦争せんそうにいつてきなながら、寂さびしく、かわいそうだった。その後病ごび氣きのため死しんでしまつたが、こんど帰かえつたら、お墓はかへお詣まいりを

して、昔のおわびをしなければならぬ。」

夜中ごろ、汽車は山間にかかりました。山には雪がつもって  
 いました。急に寒気がくわわって、忘れていた傷口がずきずき  
 と痛み出しました。

「あの老人は、しんせつにも傷口が痛みはしませんかときい  
 てくれたが……。」

清作さんは、自分よりは、もっと大きな負傷をしたり、ま  
 た手術をうけたりした傷兵のことが、思い出されたので  
 した。あの人たちは、いまごろ、どこにどうして日を送っている  
 だろうか。このごろの寒さに、傷口がひきつつて、さぞ痛むこ  
 とであろうと、案じられたのでありました。

清作さんが、村へ帰ると、さすがに村のものは、温かい心をもつてむかえてくれました。そして、清作さんの喜びは、それだけではなかつたのでした。みんなが今度の聖戦は、東洋永遠の平和のために、じやまになるものは、いつさいをのぞくのであるから、簡単にいくわけがなく、戦線と銃後を問わず、心を一つにして、ともに苦しみ、相助け合い、最後の勝利を得るまでは、戦わなければならぬということを、よく知つてゐるからでした。

自分の体でできることなら、清作さんは、どんな仕事でも喜んでする決心でありましたが、さいわいに、村の産業組合に適當な勤め口があつて、採用されたので、いよいよこれか

ら銃じゆうこ後ごにて、お国くにのために余生よせいを捧ささげることにしたのです。

やがて、三月がつの季節きせつとなりました。春はるがこの村むらにも訪おとずれてきたのであります。ある日ひ、清せい作さくさんは、村むらの子供こどもたちをつれて、帰かえつたら、かならずいこうと思おもつていた、源げん吉きちさんのお墓はかへお詣まいりをしました。そこは、小高こたかい山やまでありました。

「さあ、これが話はなしをした源げん吉きちさんのお墓はかだ。お国くにのためにつくした村むらの勇士ゆうしだ。みんなよくお礼れいをいって拝おがみなさい。」

子供こどもたちは、お墓はかの前まえにならんで、手てを合あわせて頭あたまを下げました。南みなみの方ほうへゆるやかに傾けい斜しゃして、陽ひのよく当あたる丘おかのなかほどに、つばきの大きな木きがあつて、赤あかい花はなが咲さいていました。黄きいろな小鳥こどりが、その枝えだにきて遊あそんでいたが、目めを送おくると、そのふも

との方には、わらぶきの家があつて、三、四本の梅の木をつぼみが白くなりかけていました。

徐州、徐州と人馬は進む

徐州、徐州、住みよいか

と、子供らの中から、孝ちゃんが、ふいにうたい出した。清作

さんは、これをきくと、きつと頭を上げて、思い出したように、

「そうだ。ちようどもう二年前になるな。私はその徐州へ

進軍する、列の中へ入っていたのだ。みんなここへおすわり。

そのときのことを話してあげよう。」

「おじさん。戦争の話、どんな話？」

「いろいろ話があるが、思い出したから、まずその軍馬からだ。」

「軍馬？」

孝ちゃんここうと三ちゃんさんと、勇ちゃんゆうと、武ちゃんたけは、清作さんせいさくを取り巻くとまようにして、枯れ草かの上へうへすわりました。

「徐州じょしゅうへ進軍しんぐんのときは、大雨おおあめの後あとだったので、たぶん僕ぼくたちの前まえに出しゅっぱつ発はつした馬うまだろう。足をすべらしたんだな、がけ下のどろ田たの中なかへ落おちて、体からだを半はん分ぶん埋うめながら、そこを列れつが通とおると上うへを向むいて鳴ないていた。助たすけてやろうにも、ちよつと助たすけようがないのだ。それに先さきを急いそいでいるのでな。いつしよにここまできた友ともだちで、かわいそうに思おもったが、頭あたまを下さげて、そこを通とおり過すぎてしまつたよ。」

「かわいそうに、その馬うまどうなつたらうか。」

「くに出でてから幾月ぞ、ともに死ぬ気でこの馬と、攻めて進んだ山や河……。ほんとうに、そうだった。みんなが馬を見返り、見返り、泣きながらいったよ。」

「僕たち、こんど慰問袋の中へ、お馬にやるものも入れて送らない？」と、孝ちゃんが、というと、

「お馬には、図画や、つづりかたはわからないね。」と、小さな勇ちゃんがいったので、みんなが大笑いをしました。どこか遠くの方で鳴く鶏の声が、のどかにきこえてきました。





## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

初出：「日本の子供」

1940（昭和15）年4月

※表題は底本では、「村《むら》へ帰《かえ》った傷兵《しょう  
ぐい》」となっています。

※初出時の表題は「村へ帰った傷兵」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年6月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 村へ帰った傷兵

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>